

2025年3月16日（大齋節第2主日、C年）

牧師メッセージ

「神が人間を捨てることは絶対に無い」

（ルカによる福音書13：31-35）

司祭ヨセフ太田信三

エルサレムへの旅を続けるイエスに、ファリサイ派の人々が「ヘロデがあなたを殺そうとしているから、この地から離れてください。」と伝えました。それは一見、良心的な提案のように感じられます。しかしイエスは、その提案には従いませんでした。なぜでしょうか。

ファリサイとは「分離」を意味し、ファリサイ派の人々は律法を遵守するために、世俗から自分を分離し、世俗の汚れから自らを守ろうとした人々でした。それは、言うなれば自ら守りを固め、自らの力に頼って生きる信仰でした。しかし、まことの信仰は、自らの守りではなく神の守りに自らを置くものです。神はめん鳥が雛を羽の下に集めるように人を集め、その翼のかげで守ってくださる方だからです。ファリサイ派的「守り」の信仰は、この神の力ではなく、自らの力を誇る道に繋がっています。ですから、たしかに彼らはイエスを守るために「この地から離れる」ことを提案したのかもしれませんが、その一見敬虔深く見える提案も、結果としては「人を集め、守られる」神の思いからは離れたものであったのです。それゆえ、イエスは彼らの提案を拒否し、エルサレムへの旅、十字架への歩みを続けます。

ファリサイ派の提案に対し、イエスは次のように応えました。

「今日も明日も、悪霊を追い出し、病気を癒し、三日目にすべてを終える」

「今日も明日も、その次の日も自分の道を進まねばならない」

この言葉に、人を集め、その翼のかげで守る神の意思の強さが表れています。それは、イエスが「今日も明日も」エルサレムに決然と向かう姿にも表されています。イエスは旅の行き着く先、十字架上で「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」（ルカ 22:34）と叫びます。その叫びは、御子を十字架へと追いやる人間、神から離れてしまうすべての人間を何とか救いへと招きたいという懇願です。その人間のために祈るイエスの姿に、神の人間への思いの深さが表されています。人間が神の招きの手を振りほどき、御子を殺すその時においてなお、神は人を求めてくださるのです。人間が神を捨てたとしても、神が人間を捨てることは絶対に無いのです。

人は預言者を殺し、救い主をも殺しました。しかし、神はそんな人間から決して離れることなく、悔い改めて立ち返ることを望まれます。あらためて、人間存在としての自らを省み、自らの力ではなく、神の深い愛に基づく力強い救いの招きにこそ、信頼して生きたいと願います。